



No.208

ティークレイク

Tea Break

昭和って凄い?!

会員 正林 真之

久しぶりのドライブに行き、サービスエリアにたまたま「懐かしのフォークソング」みたいなCDがあったので、余興に買って来て、車内で聴いてみた。

まあ、定番とも言えるが、最初に出てきたのが、南こうせつ かぐや姫の「神田川」。風呂屋って何?! 3畳一間って、狭くね?! だいたい、何で男性のほうが女性よりも長風呂なわけ?!

これはまあ、今の時代ではなくても、昭和の時代ですら「疑問」とされたことであった。男のほうが長風呂なんてことは、あの時代でもそう無かったことなのだから仕方がない。

けれども、村下孝蔵の「22才の別れ」。その中にあるフレーズに、「私には、鏡に映ったあなたの姿を見つけれず」、 「私の目の前にあった幸せにすがりついてしまった」というところで娘が、「目の前にあった幸せ」って、一体何?! と質問してきて、即座に「そんなの、ことさらに言わなくたって分かるだろう?! 結婚に決まってるじゃん」と答える私に対して、「わからないよ! だって、好きでもない男と結婚するのが、どうしてそんなに“幸せ”なわけ?! しかも、付き合っている人が居るのに、それと別れてまで、しかも、“すがりついて”までする必要なんて、あるの?!」ということである。だいたい22歳で結婚って、早くね?!

これは、いくら説明したって、わからないだろうなあ。そんなふう思う。だいたい、昭和時代には、裁縫等の手に職がある場合の特殊なケースを除き、女性には経済力が無いのが普通であり、男性の経済力に頼って生きるのが一般的であった。

けれども、今の時代では、まず、男性とて、自分以外の配偶者の生活までカバーできるような収入のある男性のほうが少ない。それが普通である。そしてまた、女性

の経済力も男性のそれと遜色なく、独身であったとしても十分に生きていくことができる。こんな時代に生きている本人に対して、昭和時代の常識というのは、到底理解することができないであろう。

よくよく考えてみれば、昭和時代というのは、シートベルトをする必要すら無かったし、だいたい酔っ払い運転をしていたって、そんなに大きな罪ではなかった。飛行機の中でもタバコを吸ってよかったし、「今日も元気だタバコが美味しい」なんてことまで言われていた時代である。

喫煙率は70%を超えていたし、電車の中にも灰皿が設置されていて、大人の男というのは、皆が皆、全員がタバコを吸うものだと思っていた。だいたい、大の男がお酒を飲めないという「飲めないんですか?!」と訝しげに聞かれるように、「えっ、吸わないんですか?!」と聞かれたものだ。「タバコの臭いのシャツに…」というフレーズが入っている流行歌が当たり前のよう流れていた。

ただ、そのうちに禁煙車両というものができたかと思うと、いつのまにか、今度は喫煙車両というものが設置される方向に“反転”し、ついには全車禁煙となった。今から過去を振り返ってみると、中島敦の山月記では、虎になった男が「何で俺は虎になったんだろう?!」などと思っていたものが、いつの間にか、「何で俺は以前は人間だったんだろう?!」と思い始めてしまったような、そんな感じである。

そうした流れの中で、我々の業界も、かつては「特許部」であったものが、いつのまにか「知財部」となり、もう元に戻ることはない。

こと結婚については、「結婚イコール幸せ」という考え方は、もう古い考えのようである。我々の時代には、まあ誰とでもよいから結婚するのが良いくらいに考えていたが、もうそんなことはない。結婚するだけで幸せになれるなんて、もう殆どの若者は考えていない。

これについては、かの東大教授の上野千鶴子氏などは、「だれとでもいいから結婚する、というのはすべきではない」ということで、「どこかのおじさんやおばさんが言うように、「とりあえず結婚しなさい」とか「だれとでもいいから結婚しなさい」なんていう無責任な言辞には耳を貸さないよーに（笑）。もうそんな時代はとっくに終わったのだから」とまで言い切っているように、生活のために好きでもない男性と結婚するという世界観は無くなっていくのだろう。

かつての昭和時代の結婚式では、確か、イルカの「なごり雪」を泣きながら熱唱して娘を送っている父親が居た。「めでたいお祝いの宴で、別れの歌かよ…。これって、ご法度じゃないの?!」なんて思ったりもした。

確かこれも、先の「22才の別れ」と同様、これから故郷に嫁ぎに帰っていく恋人を見送る歌で、昭和時代って、こんな歌が多かったよなあとと思う。「22才の別れ」

では、はっきりと「あなたの知らないところへ嫁いでいく私にとって」と歌われている。

けれども、はっきりと「嫁ぐ」とか「結婚する」とかいう言葉が無い「なごり雪」は、実は、いかようにでも解釈できる余地がある。

その中のフレーズである「時が来れば、幼い君も大人になると気付かないまま 今、春が来て君はきれいになった。去年より、ずっと、きれいになった…」そのときは、結婚式の時に別れの曲なんて、無粋だなあなんて思ったりしたが、既に高校を卒業してしまっている娘を前にすると、とてもではないが平静ではいられない。別れの日、そんなに遠い話ではない。この娘は、いったい、いつのまにこんなに大きくなってしまったのか。あの歌詞の意味はこういうものだったのか。

車の中で聴いているだけでも、色々な思いが交錯してじわっと来る。もしこれが結婚式であったのなら、とてもではないが「なごり雪」を最後まで歌える自信など、ない。これだけは、時代が令和に代わろうと関係が無い。でも隣で娘が、「あっ、パパ泣いてる。変なの?!」と言っている。どうやら、当の本人は、昭和の歌詞が懐かしくて泣けていると、そんなふうには純粋に思っているらしい。